
リリカルな世界で普通に生きたい

R E G E N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルな世界で普通に生きたい

【Nコード】

N8960Z

【作者名】

REGEN

【あらすじ】

神サマとやらのミスで死んだからテンプレ通りに転生した………
…けど俺が原作介入しなくてもハッピーエンドになる世界だから原作とは関わらずに普通に生きるぜ！

《ここまでテンプレ》

処女作です、又かなり稚拙な文章です。誤字、脱字あります。

ブログ はいはい、テンプレテンプレ（笑）（前書き）

あらすじにも書いていますが、大事な（ry

- ・処女作

- ・稚拙な文章

- ・誤字、脱字あり

それでも構わん！って方はドーゾ

ブログ はいはい、テンプレテンプレ（笑）

「すんまそん」

「だが許さない」

「（´・ω・｀）シヨボーン」

俺、西神悠馬の前で土下座するジジイ。このジジイはどつやら神で、更に言っていると俺は死んだらしい。もう言わなくても分かるよな？アレだ、テンプレだテンプレ。

「で、何処行きたい？」

「そつだ、京都行こう」

「……………ないわー」

テイク2

「で、何処行きたい？」

「えー……………転生とかいいよ」

最近は無理矢理原作に介入させられるとかもよくあるしな。何があるか分からんから拒否。

いいか？俺は面倒が嫌いなんだ。原作介入なんて真っ平御免だね、何処そのハムじゃあるめえ。

「無理じゃ」

「ゑ？」

「その選択肢は無い」

「……何それ理不尽」

強制とかド〇クエかよ、マジ解せぬ。
じゃあ、とりあえず――

「リリカルなのはつてのでもいい。あ、俺が介入しなくてもアリシアやプレシア、リインフォース、マテリアルズが救われる世界で」

原作そんなに知らんけどな。二次小説が面白かったから選んだ、後悔も反省もしない。

介入しないから助けられない人が出てくるけど、助かるように設定したら何も問題は無い。中々の名案だとは思わんかね？

「あい分かった。次は能力じゃな」

いいのかよ。まあこれで俺の原作介入は無くなった、普通に生きられる。

ふむ、能力ねえ……正直戦闘に関する能力はいらん。むしろ日常生活で使える能力が欲しい。

「いらん、どうしてもってなら日常生活向けので。魔力だっけ？あれもちよい高いぐらいでいい」

「ほー…随分謙虚な奴じゃのう、僕の知り合いなんか転生者の能力がチート過ぎて頭抱えとるっちゅうに……」

原作に介入する気が微塵も無いからな。

つか、その知り合いの神アホだろ。だったらそんなチート能力やるなよって思うんだが。まあ他人事だからどうでもいいけどさ。

「じゃあデバイスはどうする？これはどっちでもええぞ」

いらん、と言うと思ったか？残念だったな、ハズレだ。

介入はしないが魔法を使ってみたい、というのが理由だ。だって空飛べるんだぜ、憧れるやん。

「いる、インテリジェンスとアームド。チートなのは止めろ、デザインは任せる」

「意外じゃな、まあええがの。デザインは何でもええんじゃな？」

「構わない、が……あんまり厨二すぎるのも止めろ」

「…了解した、では「あ！」なんじゃい、まだあるんか？」

……これだけは言わんと後悔する、間違い無く後悔する。

「容姿は普通で、あと名前は日本人名。これ絶対」

「チツ、気付きおつて……」

神が舌打ちしていいのかよ!？

と、叫ぶ前にテンプレ通り穴に垂直落下していくのだった。

「ま、恋愛フラグはバリバリ建てるけどな！！喜べ少年、君はハレムを築くのじゃ」

神エ……お前それでいいのか？

ブログ はいはい、テンプレテンプレ（笑）（後書き）

如何だったでしょうか？

有り難い御指摘、お待ちしております。

第一話 平穏な日、妹が可愛すぎてヤバイ（前書き）

注意

いきなりggdggdです。

誤字、脱字の可能性大。

それでも構わん！って方はドーゾ

第一話 平穏な日、妹が可愛すぎてヤバイ

まあ……転生っていう位だから、赤ん坊からリスタートなわけだ。

父や母は俺を懸命に世話してくれる、いやぁいい家庭に生まれたもんだ………なんて思ってたのも束の間、赤ん坊である俺は当然何も出来ない。いや、泣いたり笑ったりは出来るがそれだけだ………それしか出来ない。

詰まるところ、何が言いたいかというと

「（ああ……これ何て羞恥プレイだよ。やめて！そんな楽しそうにアレを処理しないでえええ！！！！！！！！！！）」

「はーい、綺麗になりましたよー」

母は強し。笑顔でアレの処理シテヤガル。

そして俺のライフは羞恥でガリガリ削られていきます。穴があつたら入りたいとはこの事が、よく分かったぜ。

キングクリームゾンって便利だよな、いやホント。

「悠馬？？ご飯出来たわよ」

「はいよー」

緋崎悠馬、5歳になりました。

「あんな黒歴史はしまっちゃんねー」

「ねーお兄ちゃん、くろれきして何？」

ヒョコつと俺の横から体を乗り出すMy sister（妹）
おおっ、かわゆいのう。ちなみに名前は緋崎結衣、3歳だ。
母似で茶髪、俺は黒髪だった。

「……………あんまり思い出したくない昔の事だ。結衣、早く席に座らんしゃい」

「あいあいさー！なのだ、お兄ちゃん」

かわゆい！

何この娘、可愛すぎる天使か。
もうシスコンになってもいいや。

「ふあ……ん、おはようさん二人共」

「はよ、父さん」

「おはよー！パパ！」

「ん………目玉焼きか、悠馬…醤油取ってくれ」

「あいよ」

「サンキュー」

俺の父、緋崎効だ。たしかぴったり三十路だった筈。

元々目に病気を患っているらしく常にサングラスを着けている。ちよつと強面だけど優しい父親だ。

職業は不明、家ではあまり仕事の話をしてないので何をやっているのかは分からない。ただ、収入があるのは確かだ。

「おはよ、あなた。あ、悠ちよつとマヨネーズ取ってくれる？」

んで俺の母、緋崎真弥。まだ二十代…とのこと。

今時珍しい専業主婦である。

そしてド天然、これに関してはもはや手の施しようがない。

「……………ほい」

「さんきゅー……………む、何？その呆れた感じ」

「俺は醤油一筋ですたい」

「あら、マヨネーズもアリよ」

「……せうゆ！」

「マヨネーズ」

第二次目玉焼き戦争勃発。

目玉焼きには醤油派です。皆さんはどうでしょうか？

ん？皆さん？誰だよ、皆さんって……まあいい

「醤油こそ正義だ！」

「落ち着け、人の好みなんざどうだっていいじゃないか」

と言いながら七味をぶっかけている。しかもかなり。

父さん……いくらなんでも七味はどうなんだ？あ、妹は俺と同じ醤油です。

「ねー早く食べないと幼稚園遅れちゃうよ？」

「ちょっとくらい大丈夫さ、幼稚園はかなり近いからな」

めっちゃ家から近いんだよな、幼稚園。だからギリギリまで時間を潰せるってだけなんだけど。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

結衣かあいいよ結衣。

ってなわけで幼稚園到着。
いやゝ、近いっていいわマジ便利。

俺は年長組、妹は年少組。それぞれの部屋に入っていく。
ああ、妹よ…そんな悲しい顔で俺を見るんじゃない！俺だって辛いんだからさ！！
あ、やべ完全にシスコンになっちった……まあいいや

「おい緋崎、野球しようぜ」
「中野」

というわけで野球（に近いもの）をプレイ中。
で、俺はピッチャーをやっていて先程俺を野球に誘った中野はキャッチャーをやっている。

この中野とは年少の時から付き合いだ。たまにケンカもするし、菓子を分け合ったり、ココロと一緒に読んだり…俗に言う親友って奴。

「行くぜ中野オ！消える魔球だツ！！」
「よっしや来たあ！」

バン！とグローブを叩き、気合いを入れて構える。
ちなみに俺のチームが三点、相手チームが二点という僅差。

「な、なんだよ消える魔球って…」

相手バッタービビッてんなあ。
ちよっち怖がりすぎじゃねえか？

「そのままだよ、んじゃあ……投げるぜ！」

俺は、何も持っていない右腕を思いっきり振りかぶった。

「え？あ、クッソ！」

がむしゃらにバットを振るが当たるはずもない。
まず投げてすらない。

『ズバーン！！』

「空振りだな、素振り凄いですね」

そして中野のグローブの中には既に仕込んでおいたボールがある。

「ってインチキじゃねーか緋崎！真面目にやりやがれ！！」

「……そーだそーだ！」

おおっ、おふざけが過ぎたか。野次がすぎえ。

「んじゃあ本気で投げるぜ！」

「来いッ！！」

「ふっ、勝利」

「くそう……っ、次は勝つ！」

「リベンジはいつでも受け付けてるぜい」

結果、俺のチームが四点で相手チームは二点。

いやー強かった。なんせ相手のキャプテン（目の前のコイツ）はバリバリの野球少年だったからな、そこいらの奴とは格が違う。次は勝てるかね……？

「緋崎！やったな！」

「ああ、次は分かんねーけどな」

「へっ、俺達是最強のコンビなんだ！早々負けねえよ！」

肩を組み、用具を片付けて部屋に戻る。そろそろ時間だ。

あ、ちなみに中野の下の名前は海人だ。カナツチだけど海人だ。

幼稚園が終わり、中野と帰る。

勿論年少組に寄って結衣と一緒に帰るのはもはや言うまでもない。

「お兄ちゃん！」

「ん？結衣！何処？」

ドゴオ！

「うばあー……」

「えへへ、お兄ちゃん♪」

結衣さん、痛いです。タツクルは止めて、死んでしまいます。あ、でも結衣のタツクルならいいかな？

「お前アホだろ」

「何い！？結衣だぞ！」

「いや、正常か。そういう奴だよな…お前って」

最近、結衣が天使の生まれ変わりなんじゃねえかって思ってきた。
そんなくらいかわゆい。

「んじゃ帰るか」

「おー！」

「おう」

分かった事は、原作キャラ……つまり高町なのはや月村すずか、アリサ・バニ、バーニ……バーニングだっけ？はいない。
いや言い方が悪いな。俺と同じ学年にはいない。

結衣と同じ学年にいた。茶髪のツインテールのあの娘がいた。そう、あの高町なのはが。他の娘はいなかった。

つまり、これは、結衣がアクションを起こさない限り接触は無い…

……… あっても友達の兄程度か…

「俺の平穩はここにあつた………これほど嬉しいことはない」

「何いきなり泣いてんだよ、気色ワリーな」

貴様には分かるまい！普通に生きようとして無理矢理原作介入をさせられた転生者の苦悩を！

だが、俺にその心配は無くなったな。やったぜ！

これも神（笑）のおかげか？……もう（笑）なんて着けないよ、神様アンタ最高だ。

「ともーじゃん？そうは上手くないんじゃないよ、この世知辛い世の中はのう」

ん？なんか聞こえなかったか？気のせい…か。

「あ、○ッシュの新巻出てる……買っとかねーと」

第一話 平穏な日、妹が可愛すぎてヤバイ（後書き）

父親はあの人です、分かる人……いるかな？

次話辺りにデバイスを出したいと思います。お楽しみを
はあ………原作が遠い

第二話 魔法使い（前書き）

毎度の注意

かなり g d g d です

本当に酷い………なにをどうしたらこうなるんだってぐらい
もっと上手く書きたいです

では、ドーゾ

第二話 魔法使い

「悠馬、話がある。こっちに来なさい」

父さんに呼ばれて居間に行く。何やら重要な話のようだ。
こんなに真剣な父さんも珍しい。

結衣はもう寝てる。昼間、かなり遊んだからだろう。

「あなた……」

「判断は、悠馬に任せる。お前はただ……支えてやれ」

「……分かった。でも、あの子が断ったら、その時は――」

「ああ、分かってるさ」

「……………話って何？父さん」

「ああ——いきなりだが、お前はこの世に、魔法が存在すると思うか？」

質問を質問で返すのはどうなんだ……つか、答えにもなってないし。魔法、ね。そっぴやこの世界にや魔法があるんだよな………すっぴり忘れてたケド。

「……………さあ？あるって思えるなら、あるんじゃない？」

「……………」

沈黙、か。

空気がピリピリしてるし、もしかして…怒ってる？いやいやいや！それはないだろ！………ない、はず。

「……………ふ、ふふっ………ははははははっ！………」

「と、父…さん？」

え、ちょ………いきなり笑い出すとか止めて。

多分、今さっき俺の体がビクウ！ってなっぴたと思う。ジ〇リみたいに。

「そっぴか………あると思えばある、か」

ひとしきり笑った父さんは、満足そうに俺の言葉を繰り返す。

「なあ、悠馬」

「……………ん？」

「魔法使いになってみないか？」

「魔法使い……………」

まさかこんなに早くに人生の分かれ道に直面するとは……………

まあ答えなんざ決まってるけどさ。

「俺は……」

「俺は？」

「なる。魔法使いになる」

『なりたい』から『なる』んだ。
誰の為でもなく、自身がそう望むから。

「そうか」

その一言を告げ、席を立つ。

「少し待っていてなさい」

「…？…はい」

居間から姿を消し、数分した後、再び居間に姿を見せた。
さっきの事を母さんに伝えたんだろう、母さんも一緒だ。

「本来、お前みたいなの…子供にこんな事を聞くなんてどうかしてる
んだろうな」

「……」

母さんは何も言わない。

ただ、手に何かを持ち父さんの後ろに立っている。

「いや、お前だからこそこんな事を聞いたのかもしれない……お前は周りの子に比べてかなり大人びている」

それこそ本物の大人みたいに、と父さんが小さく言う。

「……魔法に関わる以上、どんな危険とも隣り合わせだ……それでもなるんだな？」

父さんの言うとおり、魔法は俺の日常を非日常へと変えるモノだろう。

危険、それこそ大怪我を負う時もあるだろう。

父さんは警告した、それでも……なりたいんだ。魔法使いに。

「うん、絶対に」

「……………母さん」

「……はい」

父さんは母さんから藍色のネックレスを受け取り、それを机の上に置いた。

「これって……」

「これはデバイスと呼ばれる、魔法を使う時に必要な物だ」

『初めまして。君が俺のマスターで間違いないな?』

「っ!?!?」

あ、ちょっとビックちまった。

喋るって分かってても結構驚くもんです。

「はははっ、そう驚くのも無理はない。ムラクモ、自己紹介をしろ」

『了解。俺の名はムラクモ、マスターの相棒だ。よろしく頼む』

「あ、うん…よろしく」

ついでにどんな形かと言うと、

藍色の小さな鎖状のネックレスで、白と青の配色の剣があり、真ん中に丸いオレンジのコアらしき物がある。大きさとしてはざっと4cmくらい。

更に、その左右に同じ形の黒いナイフが二つある……これにはコアが無いみたいだ、大きさはだいたい2cmくらい。

「よし、じゃあ魔法やデバイスについて説明する」

「つまりムラクモはインテリジェントデバイスってヤツなのか、んでこのナイフはアームデバイス、と……………」

「そうだ。かなりハイスペックだからな…そこいらのデバイスより扱い難い」

話を聞くと、このムラクモはかなりハイスペックなデバイスらしい。元々、インテリジェントデバイスってのは扱いが難しいと覚えているがその中でもかなり扱いづらい部類に入るそうだ。

アームドデバイスの方はまだ一般魔導師でも扱えるとのこと。

「まずはアームドデバイス……アーマーシュナイダーの方を使つて、飛行と障壁の魔法を覚えなさい。やり方はムラクモが教えてくれる」

「え？父さんが教えてくれるんじゃない……」

てか、アームドデバイスにも名前あったのか………そりゃあるよな、うん。

「どんな魔法がお前に適しているか分からんからな、一種のテストみたいなもんだ」

「あ、なるほど………んじゃ早速やりますか！」

『そんなに焦らなくても大丈夫だ、マスター。魔法は逃げない』

そんな呆れた感丸出しで言うなよ！こっちはなあ！魔法が使えるから大興奮してんだからさあ！！

ああ………早く空飛んでみてえ。

「意気込みはいいが、その前にまずはデバイスを起動させられるか

確認をしないとな」

『そついう事だ』

「……………」

ですよねー。

例えるならバット無しで野球をやるようなもんか？

と、いうわけで

「セットアップ」

ムラクモが光り、その光が俺を包む。

数秒たったあと光は消え、俺は自分の体を見た。

「これがバリアジャケット……………なんか軍服みたいだな……………」

そして腰にはホルスターに入ったナイフが。
ん？……………剣が無い。

「…あれ？」

『俺ならここにだ』

「え？……………つて……………」

何で待機状態のままなんですか？ムラクモさん。

「適性はあるようだな」

え……この状態で分かるのかよ!?

「俺が使えないようにしてるだけだ、バリアジャケットを展開出来たら扱える」

………はい?

「今……何て?」

「言っちゃ悪いが、お前にはまだソレは早過ぎる」

そう言い父さんもバリアジャケットの様な物を着る。てか、父さんも魔導師だったのか……。

バリアジャケットは俺のに似ている、細部や配色こそ違っがだいたいい一緒だ。

そして、何より目を引いたのは馬鹿でかい剣だった。

「お前のは体に合わせて、これより小さくしてあるが……それでもまだ持てんだろう」

ああ、つまり技術云々以前に身体的に無理……と。

確かに、自分の体よりでかい剣なんざ持てる気がしねえ。

「流石に無理だと思うよ、自分でも」

『……しばらくはそっち（アームデバイス）で練習してくれ。ま、指導やアドバイスくらいは出来る』

「うん、じゃあ……」

「今日はもう寝なさい。明日からでも出来るさ」

「む……………はい……………おやすみ」

まあ……………仕方ない、か……………

「ああ、おやすみ」

余談だが、このデバイスは父さんのデバイスが元になっていて、ムラクモのAIは父さんの性格がモチーフらしい。しかも作ったのは母さんなんだってさ……………母さんにせよ父さんにせよ、何者だよ！？

第二話 魔法使い（後書き）

デバイスを貰うの巻、でした。

デバイスの設定や主人公の設定って必要かな…？

あ、多分次々回あたりからキンクリを多様すると思います。

修業なんざ見ても面白くないですね、さっさと原作に絡めって話ですよね……いや、ホント

第三話 選んだ道、そして原作に介入するのは………嘘だと言ってよバー

皆さん、明けましておめでとうございます。

相変わらずgdgdしか書けない低脳なREGENです。

そして今回はご都合展開があります。なんかもう無茶苦茶やっちゃった感がががが…

そんなの気にしないって方はドーゾ……

ガキ使の最初から三時間半くらい録画出来てないってどゆことなの？馬鹿なの？死ぬの？

第三話 選んだ道、そして原作に介入するのは………嘘だと言ってよバー

あれから二年。

毎日修業をして魔法を覚えた。

どうやら俺には補助系の魔法の方が合っているようで、転移やバインド、障壁はすぐさま覚えていった。飛行だけは今だに不安定だが……。

その分、攻撃系の魔法はすこぶる覚えが悪い。覚えが悪いというよりセンスが無いと言った方が適切か。

スフィアを作ろうとしても、二つが限界。砲撃魔法なんざ収束すらままならない状況だ。

「はっ！でえあああッ！！」

「甘い！」

「ッつぁー！」

そして現在進行形でアーマーシュナイダー（以下AS）の訓練をしている。

相手は言わずもがな父さん。予想通りのスパルタです、体痛え……。

そして、父さんと俺がいるのは無人世界。

魔法を扱うには家じゃ危険すぎる、かと言って山やらでやるのも人目に見つかる可能性がある……とのことで無人世界に。

父さんの休みの日と学校の休みの日が重なる日はこうして対人訓練をする。他の日はだいたい魔法の訓練（室内で出来る様なもの）や素振りなどをやっている。

長期休暇に入ると無人世界でのガチンコサバイバル……死ぬる、本気で死ぬる。何度三途Riverを渡りかけた事が……。こんなことを平然とやる父さんマジ鬼畜。

「振りが大きすぎる！それでは腹がから空きだ、もっと振りを小さくしろ。ま、早さやタイミングは悪くなかったがな」

「はい……！」

「一旦休憩だ、詰めすぎは体に悪い」

「よっしゃああああ………」

魔法だけじゃなくてどうしてASの訓練をしているかというところ、デバイスがナイフ型なんだから扱いづらい知つとかないと駄目だろ」と、父さんの有り難いお気遣いによるものです。はい。しかもナイフの使い方だけじゃなくて、体術も組み込んでくる。ちよつとは手加減してくれてもいいじゃないか！

「あゝ……生き返る。ホント死ぬかと思ったし」

水をガブ飲みして一息つく。んで、持ってきたサンドイッチを食べる。あ、ちなみに作ったのは俺。これは能力のおかげだ。

最近……そう、発現するまで頭の中から完全に忘れ去っていた、神から貰った能力。

表すと、「家事を完璧にこなす程度の能力」と「美味しい料理を作れる程度の能力」である。

神よ、何故東方なんだ？しかし、かなり日常に役立つという俺得能力だから言及はすまい。

しかも俺の手作り料理を結衣が嬉々として食べてくれるので、二つ目の能力には感謝としか言いようが無い。

結衣ちゃんマジ天使。こんな可愛い妹がいて俺は幸せです。

「……………何故だ」

そして頭を抑える父さん。

ハッキリ言おう。父さんは料理が出来ない。

出来ないとか生易しいもんじゃ無い。

もはや別の何かだ。

……はっ！まさか、錬金術！？

「それしか考えられんよな……しかし、そうなるそこいつはかなり厄介な錬金術だなあ………」

「何か言ったか？悠馬………なに？訓練を五倍にしてほしい？分かった分かった、十倍にしてやるから何も言っな」

＼（＾０＾）／

口は災いの門とはよく言う………俺、訓練が終わったら彼女と結婚するんだ。
いないけど

「さあ、訓練を始めようじゃないか」

じゃ、ちよつくら逝ってくるＺＥ

その後、彼の行方を知るものは誰もいなかった。

｝side 結衣｝

最近、お兄ちゃんがお父さんとどこかへ行っちゃう。

お母さんに聞いても、「大丈夫よ。ちゃんとお兄ちゃんは帰ってくるわ……我慢が出来る女の子はモテるのよ？もしかしたら……ふふっ」と言う。

お兄ちゃんの、その、かか彼女、にはなりたいけど……でも、お兄ちゃんが心配。

待つてるだけじゃ嫌だよ……お兄ちゃん……会いたいよう……寂しいよ……

「あ……公園」

ここはお兄ちゃんとよく遊ぶ公園。
だから、知らないうちに来ちゃったのかな？

「はあ………ん？」

女の子がベンチで泣いてる。

あ、あの子は高町さんだ。

普段は私は他の子と遊んでるし、クラスが違うからあんまり会う事は無い。知らないわけじゃないけど。

なんで泣いてるんだろう？

「ねえ……」

「………あ……」

高町さんが私を見る。

「高町さん……だよ。なんで泣いてるの？」

「え？えと、その……」

最初は、泣いてたせいでちょっと聞きづらかったけど、聞いてるうちに泣き止んでしつかりと聞けた。

高町さんのお父さんが入院したから、いろいろ忙しくて家に誰もいないらしい。

「なのはが、悪い子だからパパは帰ってこないのかな…？」

最後にそう言っで、また下を向いた。

「うっん、そんなことない！高町さんは悪くないよ！」

高町さんは悪くない。

高町さんのお父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも悪くない。

だれも……悪くないよ。

「じゃあ！なんでパパは帰ってこないの！？なんでママもお兄ちゃんもお姉ちゃんもお家にいないの！？」

「え、あ……それは………わかんない」

「……………そう、だよね…ごめんね」

また泣きそうになる高町さん。
そんな顔しちゃダメだよ！

「あ…で、でも！」

「…？」

「お父さんは帰ってくるんでしょう？だったら待とうよ！」

「そんなの……………」

「分かんないよ…………でも、諦めるよりずっといい！ね、だから待とう。お父さんが帰ってくるのを…………みんながお家で一緒にいられるようになるのを…」

「うん…………そう、だね」

高町さんはちょっぴり泣きそうな顔で、笑った。

「じゃあ私も一緒に待つ。今日から私と高町さんは友達だね」

私はにっと笑う。

「…お友達？」

「そ、友達」

「……うん！じゃあ私はなのは、高町なのは」

「私は緋崎結衣、結衣って呼んで」

「……でも、いいの？その…友達なんて」

「いーのいーの。なのちゃんは嫌？」

「嫌じゃないけど？………な、なのちゃん？」

「ダメ？」

「こっちの方が呼びやすいんだけどな……」

「ううん、そんなことないよ」

「ありがと。じゃあ友達なんだから遊ぼうよ！」

「ううん、何しよっかな……」

「え？えと……」

「そうだ！ブランコでどっちが高く上がるか競争しよ！」

「い、いいの？」

「なんでそんな事聞くんだろう。」

「あつたり前じゃん！友達なんだから！」

こうして、私となのちゃんは友達になりました。
そのあと、なのちゃんといっぱい遊んでまた遊ぶ約束をしてお家に
帰りました。

「ただいま〜！」

「おかえり、随分楽しそうだな……いい事でもあったのか？」

「あ、お兄ちゃん！」

発 見！！

「ちょ
」

ドコォー！

「ぐふっ……」

「あのね！私ね！新しいお友達が出来たんだよ！」

私の頭をナデナデしてくれる。

さずがお兄ちゃん。

「高町なのはちゃんっていう子で——」

「……………なんだって？」

お兄ちゃんの顔がすごい事になってる。

そんなお兄ちゃんも私は好きだけどね。

明日は何して遊ぼうかな？

第三話 選んだ道、そして原作に介入するのは………嘘だと言ってよバー

介入するのは妹でした、の巻

ついでに言うところの小説にはナルシなチートオリキャラは存在しません。

期待した方（主にフルボツコ的な意味で）はごめんなさい。

そろそろ感想欲しいなあ………厳しいご指摘でもいいから、いやむしろ指摘してくれた方が有り難いです。

第四話 時の流れは早い（前書き）

また性懲りもなくgdgdな文章になってしまった。

そして超ご都合展開多数存在。文法がおかしかったり、誤字や脱字もあると思います。

私、REGENがアホなばかりにこんな駄文しか書けないのが残念です。

それでも見てくださる方、本当にありがとうございます。

長々と失礼しました、それでは本文をドーゾ。

第四話 時の流れは早い

「おい海人、ス○ブラしよーぜス○ブラ」

「いいぜ。来いよ悠馬！モンスターボールなんて捨てて一対一でかかって来い！」

「ブツ倒してやらああああ！！！」

キングクリムゾン……『過程』は吹っ飛び、『結果』だけが残る。二次小説においては時間をすっ飛ばすパロディとしてよく使われる（と私は思ふ）。

うん、「また」なんだ。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。でも、この（ry

緋崎悠馬、中学三年生。

緋崎結衣、中学一年生。

三話から七年が経ちました。ん？三話って何だ？

……………まあいいや。

いきなりだが、落ち着いて聞いてほしい。

俺、原作に関わっちゃった

………うん、君の言いたい事は分かる。「何いきなり関わってるわけ？言ってる事とやってる事が違い過ぎる！これが正しい事なんですか、猿渡さん！」って事だろう？

言い訳をするなら『仕方なかった』んだ。

だってさ、いきなりアリシアとプレシアがいきなりリビングに落ちてきたんだぜ？しかもアリシアなんて素っ裸だよ素っ裸。その時家にいたのが俺一人でよかった、今思い返してもそう思う。

何で家に落ちてきたのか、その後よく分かった。二人をどうする

か悩んでたらいきなり真っ白な空間にいたもんだからびっくりしたよ……転生系では稀によくある神様とお話し、ただし現実では一秒も経っていないっていうやつだったんだ。

そしたら神様が「あ、やっぱ転生者が関わらないと無理っすわwwwwww」とか言うから、その瞬間に右ストレートをくれてやった。誰だってそーする、俺だってそーする。

これはA・sも同じらしい……マジ解せぬ。

「じゃあどうやって救うのさ」

「悠馬よ、これを使うのじゃー！」

「こ、これはS&W M500じゃないか！………

………って、おふざけもいい加減にしとけよクソジジイ……！」
とりあえず、貰ったM500を神様の眉間に突き付けたのは悪くない……うん、悪くない。

閑話休題

このM500は神様特別製らしく無音かつ無反動というトンデモ性能。更には『撃った者の運命を捻曲げる』という超ド級のチートを備えていた。

あれ？こんなもん造るんなら端っから運命捻曲げときゃいいんじゃない？と思ったので追撃の左ストレートをくれてやった。やっぱり神（笑）やったんや！

気が付くとそこはリビングだった。時計を見ると一分ぐらいしか長針が動いていない……こんな所にチート使うなら（ry

とりあえずアリシアが素っ裸のままは色々とマズイ気がするので結衣の服を拝借して着せておいた。そのままでもいいのにか思った奴は【帰れ】

手にしたM500をプレシアに向ける。当たっても傷は着かないと

神（笑）は言うが、俄かに信じられない。まあ、人間そんなもんだ
とは思うが。

一旦引き金を引くのを止めて、銃口を下ろす。すると、何という事
でしょう……宙に紙が舞っているではありませんか。
放っておくのもどうかと思ったので手に取る。

「緋崎悠馬君へ」

プレシアの病気は治しておいたから、撃たなくても大丈夫です。

アリシア・テストロッサと同様に夜天の書の管制人格、またマテリ
アルズを救って下さい。

貴方様のご希望を裏切る様な事になり、深くお詫び申し上げます。

最高神より

え？なあにこれえ？最高神って何？外人？歌？食えんの？美味しいの？いやk o o ーになれ、俺。こんなのテンプレだテンプレ！よくある事なんだ！

読み終わった瞬間に紙が消えるのもテンプレの一つなんや！

「……………う…」

あ…………ヤベ…プレシアさん起きそう。

仕方ない、腹を括るか。

俺はアリシアに向かって引き金を引いた。

まあ…………そんなこんなで結局プレシア達はフェイトと一緒に海鳴に住むことになった。

唯一ミスったと思う事はプレシアとアリシアに顔を見られてしまった事。今更後悔しても時既に時間切れってやつだ。今じゃスーパード見かける度にアリシアの相手をするようになった…………嫌じゃないけどね。そこ、ロリコンって言うな！

この事はフェイトには秘密にしてもらっってい「た」。そう過去形。フェイトちゃんが家に遊びに来た時に「あの、これ…………おね、アリシアの相手になってもらってるお礼です」って菓子折り貰っちゃったからそりゃ分かるわ。

ま、なんせアリシアは今ちょうど八歳、幼い子供の口に蓋は出来ないと悟った。仕方ないね。

ついでリインフォースの事だが、この時はムラクモを使って正体をばれないように黒いコート（KHの??機関が着てる様な物）を着用したから顔はばれなかった。スゲーよな、フードを被れば正体が隠せるんだから。

結局救う事は出来たが、はやてとのリンクを保つ事が出来なかった。が、最近はやては新しいユニゾンデバイスを創っているらしい。結果オーライ…か？

今ではすっかり生活に馴染んだようで街中でたまに見かける。あれから背も伸びたし、声変わりもしたからあの黒コートが俺だとは気付かないだろう。

そっちの方が俺は嬉しい。ただでさえ原作キャラであるプレシアとアリシア、一応フェイトと関わりを持ってしまっているんだからこれ以上の関わりは持ちたくない。俺の平穩の為にも。

んで俺的に一番危惧したのがマテリアルズ。

なんせ結衣は一度夜天の書に蒐集されてしまっている。もしかしたら結衣のマテリアルも……と考えたが、取り越し苦労に終わった。マテリアルズはあの三人娘のみ、結衣のマテリアルはいなかったのだ……ちょっと残念。

敗北したマテリアルズに黒コートで近づき撃った……のは良かったのだが、戦闘のせいか都合故かそのまま気絶してしまった。

そのままほっとくのも酷なので、三人とも家へ転送した。

誰もいないと思いきやリビングには親父が居座っていた。この時ほど人生終わったんじゃないかな？と思った事はない。

三人娘は気絶したままでカーペットの上に、俺は机で手を組んでいる……俗に言うゲンドウスタイルな親父と対峙した。

「この娘達はどうした？やけに結衣の友達に似ているな」

「……………その娘達は気絶してたから、ほっとけなくて連れてきた。冬だしさ。何で似てるのかは知らない……………ほら、言っじゃん、世界に似た顔の人間は三人はいるって」

「連れてきた理由は分かった。が、正体が分からん上に結衣の友達に似すぎているのは些か不気味だな……………まあいい、目が覚めるまでそっとしてやろう」

目覚めたら目覚めたで厄介な事になった。

名前は、と親父が聞けば「星光の殲滅者」や「シユテル・ザ・デストラクター雷刃の襲撃者」や「ロード・ディアーチェ闇統べる王」と答え、家とは聞けば口を揃えて「無い」と言う。両親はどうしたと聞けば「いない」と言うもんだから親父は頭を抱えていた、そりゃそうだ。

そして、紆余曲折あって緋崎家の養子になった。仕方ない、こればかりは何も言わない。むしろこうでもしないと不安だ。

戸籍も無いのにどうやって養子にするのかは甚だ疑問だったが「無いなら作れ、それが我が家の教えだ（キリツ」とか言っていたから問題無い。そしてこの日から「父さん」から「親父」に呼び方を変えた。

何より驚いたのはマテリアルズが人間になっていた事。開いた口が塞がらないとはこの事を言うのだろう。

それはさておき、三人とも改名した……………流石にあのままだ……………なあ？シユテルは「りっか六花」、レヴィは「みや美夜」、ロードは「りん凜」となった。うん、なかなかいい名前じゃないか。

その後、結衣が帰ってきてドタバタになったのは言うまでもない。

約一ヶ月、世間の常識というものを教えてから学校に通う事になっ

た。聖祥ではなく、おれと同じ市立の小学校に………なして？

昼休みになれば俺と海人の所に来て共に昼食にし、共に遊んだ。家に帰れば結衣やなのはちゃん達と遊んで、妹sで共に勉強していた。言わずもがな美夜は勉強が苦手なようで、四人の中で一番成績が悪かった………それでも中間くらいだったのは驚きだ。

そして三人とも、今年から中学生。聖祥大附属中学に通う事になる。ちなみに俺も聖祥大附属中学に通っている。理由はまた今度語るとしよう。

学費の事で親父と話したが余裕な顔で「逆にお釣りが来る」と言っていたから問題は無い。これくらい余裕な時はだいたい大丈夫な時だと経験で分かった。

そして今日から妹達の中学生活が始まる。

「っしゃ、俺の勝ちイ！」

「オー！ノー！」

「俺に勝とうなんざ百年早えぜ！」

勝った！

何かス○ブラの対戦勝つとめちやくちや嬉しいよね。

今日は入学式、俺達在校生は休みなのさ……生徒会以外は。

というわけで海人と呼んでス○ブラをしている。さて、とそろそろ準備しとくか……え？何のつて？決まってるだろ、入学祝いのパーティーだよ。

祝ってやろう、盛大にな！

「なあ海人、これからパーティーするから手伝えよ」

「無理」

「貴様に拒否権など無い。馬車馬の如く働け」

「ひでえ！？」

流石に二人で飾り付けはキツかった。

後は逃走の準備だけだ。何でかって？んなもん聞くなよ、原作キャラとの接触を防ぐ為だよ、言わせんな恥ずかしい。

第四話 時の流れは早い（後書き）

ちよつとした（？）回想の巻でした。

マテリアルズに関しては悩みましたが人間として出すことにしました。

また、リインフォース？もはやとユニゾンできない事にしました……そうじゃないと？の出番が消滅しちゃうからね。

これもまたテンプレか……

次の話を書いたら、設定みたいのを書こうと思います。

ご指摘があれば遠慮なく感想の方へお書き下さい、なんせ私…… R E

GENはアホで文才のカケラも無いような奴です……

ご指摘をいただけるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960z/>

リリカルな世界で普通に生きたい

2012年1月8日02時45分発行